

海外日本語教育 Q & A

かいがい にほんご きょういく

このコーナーでは、海外で日本語を教えるときに、教師が直面すると思われる問題を取りあげ、質問に答える形で、読者のみなさんの参考になる情報を提供していきます。

Q 学習者が日本語の学習にあまり熱心ではない場合、教師はどのようなことに注意をして授業の工夫をすればいいのでしょうか。

A 日本語がその学校の外国語必修科目なので学習しなければならない中学生・高校生の場合はもちろんのこと、自分が勉強したいと始めて始めた大學生や社会人でさえ、途中で日本語の勉強がいやになることがあります。それには色々な原因や理由があるのだと思います。

たとえば、日本語国際センターで研修を受けている海外の日本語教師（日本語を母語としないノンネイティブ教師）は、学習者の日本語への興味・関心について、次のような問題をあげています。

「学生は日本語が難しいために好きにならない」
（タイ・大学教師）

「学習者の興味を保ち続けさせることが難しい」
（フィリピン・市民講座教師）

「学生はいったん日本語が難しいと思ってしまうと勉強しなくなり、上達しない」
（ニュージーランド・高校教師）

「漢字が難しいと感じて日本語に対する興味をなくす学習者がいる」
（インド・市民講座教師）

「日本語が大学入試科目から除外され、生徒たちの関心が薄い」
（韓国・高校教師）



まとめてみると、「日本語は難しく大変だ」「授業に興味を持たない」「日本語学習の目的がわからない」などと感じた学習者は、日本語の勉強に興味を失うのだと言えそうです。

では、日本語の学習に興味を持ち続けさせるために、どのような努力をすればいいのでしょうか。教師が現場でできるいくつかの方法を考えてみたいと思います。問題は学習者の年齢や学習目的によって異なる場合がありますが、ここでは共通する点について取りあげます。

学習の目的・目標を明確にする

それぞれのコースでの日本語学習の目的を学期のはじめに話しておくことが必要です。

また、コース全体の予定を知らせて、コースの終わりには日本語でどのようなことができるようになるのか説明しましょう。同時に、各授業時間のはじめには、その日の授業の目標をはっきりと言います。たとえば、「今日の授業の目標は、自分の趣味について説明できるようにすることです」と言ってから、必要な語彙、句型、表現などを導入し、練習をします。

日本語でコミュニケーションができるようになる授業を計画してみる

日本語でコミュニケーションができるようになったと学習者に実感させるような授業を計画することも大切です。たとえば、実際に会話ができるようになったり、手紙のやりとりができるようになったりすることです。特に、学習者にとって外国語で自己表現ができるようになること（話せる・書ける）は、「もっと勉強したい」という気持ちを強めることとなります。それには、学期のはじめにシラバス（学習項目）を決めるとき、コミュニケーションを実現できるようにするシラバスを作ること

が必要になります。

文法・文型中心のシラバスの教科書を使っている場合は、少し工夫が必要です。実際場面での会話ができるようになるためには、各課に出てくる語彙・文型のほかに必要な表現などを足さなければならぬことがあるからです。また、その時間の目標も「『～は～が好きです』という文型がわかる」というように文型を示すのではなく、「自分の好きなこと・好きな物について説明できたり、友達の好きなこと・好きな物について質問できる」というように文型や表現を使って実際にできることを目標とします。

「日本人の友達を食事に誘う」「日本人の友達に年賀状を書く」などのように、学習者が実際に日本語を使用する場面を考えて、目標を設定することによって学習者の興味を増やすことができます。

授業に変化を持たせる

教師の説明を一方向的に聞くような受け身の授業では、学習者の興味は続きません。1回の授業の中にいろいろな教室活動を入れて、授業に変化をつけられれば、学習者の興味を保つことができます。教科書のひとつの課を教えるときには次のような授業の流れがあります。

導入(新しい学習項目を示す) 基本練習(正確に覚えるためのある程度機械的な形の練習) 応用練習(実際に使えるようになるための練習)

また、新しい語彙を覚えるための練習用ゲームにもいろいろあります。文字カードと絵カードを合わせるゲーム、ビンゴ、クロスワードパズルなどです。学習者の興味に合わせて工夫してみてください。

学習意欲を高める副教材・生教材を使う

教科書を使うだけではなく、教材に変化をつけることも学習意欲を高める方法です。副教材としては、実物、絵、写真、地図、漫画、ビデオ、会話や歌のテープなどいろいろあります。日本からの資料が手に入らない場合は、自分の国で出版された日本関係の資料や雑誌の写真なども教材になるでしょう。

ときには、自然な生の日本語(新聞の記事・広告、日本のテレビ放送の録画など)に触れる機会を持つことは、



日本語の時間にペアワークをする学生たち(タイの高等学校で)

学習者の好奇心を強める上で効果的でしょう。また、近くに日本人がいれば、教室に呼んで学習者と話す機会を作ることもいいでしょう。

明るく協力的なクラスの雰囲気を作る

ことばを学習するときに、不安や緊張が強いと、学習の効果があがりません。協力的な明るい雰囲気のクラスを作ることが必要です。そのためには、教師はリラックスし、学習者を緊張させないようにしましょう。また、グループ活動を取り入れ、学習者同士のコミュニケーションをはかるようにしましょう。

また、教室の雰囲気作りのために、いすや机の並べ方、教室の飾りつけなども工夫してみてください。

学習意欲を高めるような評価をする

積極的に話そうという学習者を増やすためには、学習者の発言の誤りを直すときにも注意が必要です。まず、学習者の「よくできている」点を評価しましょう。会話の授業などでは誤りを直しすぎると、学習者は発言することを恐れるようになってしまいます。また、誤りを訂正すること以上に大切なのは、なぜ間違ったかその原因を分析してみることです。特に、大勢の学習者が間違えた場合は、教師がそれらの間違いを整理して、わかりやすくフィードバックしましょう。

誌面の都合で、ひとつひとつの項目について詳しく説明することができませんでしたが、別の機会に、具体的な例を紹介していきたいと思えます。

担当: 百瀬侑子(日本語国際センター専任講師)